

きれいな水って、 どんな水。

”きれいな水って、どんな水”
テーマに、人と自然と水の関係について
検証を重ねてきたびわろ通信。
冬号では、古くから人間の知恵を
集約してくりひろげられてきた
「ものづくり」に焦点を合わせて、
水のあり方を考えます。
はたして、人と「ものづくり」と水は、
どのように結びついているのでしょうか。

ものづくりと 水を考える。

地域の暮らしと 文化をになうヨシ。

近江でヨシ製品がつくられ始めたのは
遠く安土桃山時代にさかのぼるとい
われます。古くは民家や神社の屋根
材に用いられるとともに、建具や衝立
すだれなどにも加工され、ヨシは日本
人の暮らしに欠かすことのできないも
のとして活用されてきました。

毎年、上質のヨシを手に入れるために、
刈り取りや火入れをくり返し、琵琶
湖のヨシはそれによって健全に育まれ
てきたのです。

しかし、人とヨシとの共生関係も昭和
40年代に入ると大きく様変わりしま
した。ライフスタイルの変化や空調設備
の普及によってヨシ製品の需要が減り、
海外からの安価な輸入品が出回ると、
ヨシは刈り取りの時期を迎えても、そ
のまま放置されるようになったのです。
このような時代の移り変わりの中で、

さまざまな開発や自然環境の変化と
相まってヨシはしだいに減少しました。
水質や生態系にも深くかかわるヨシ
が減るとは、琵琶湖の自然にとつて
も大きな問題でした。そこで、滋賀県
は平成4年、「琵琶湖のヨシ群落の保
全に関する条例」を施行し、「守る」
育てる、「活用する」という3つの柱を
中心に「ヨシを復元する取り組みをラ
ートしました。県の淡海環境保全財
団では、ヨシの維持管理事業を進める
とともに、平成5年からはヨシの植栽
に関する技術研究に着手。また、ヨシ
の新しい活用
方法として「ヨシ
紙をつくりたり、
菊の栽培に適
した高級腐葉
土を製品化し、
大きな反響を
呼んでいます。



ヨシ紙を使った色紙や扇子



涼を呼ぶ衝立

人々の暮らしのなかで連続と
受け継がれてきたものづくりの歴史。
そこには、地域の自然や気候風土を巧みに活かしながら、
衣・食・住をより豊かなものにしよつとする
日本人の英知と情熱がしっかりと集約されています。
そのなかでも、わが国ならではの「きれいな水」を利用した
ものづくりは、まさに世界に誇る「ことのできる」
かけがえのない文化といえるのです。